

## 「教区創立記念日」ミサ

中野裕明司教 ミサ説教

2021年2月25日 鹿児島カテドラル・ザビエル教会

皆様、今日私たちは教区創立記念ミサを捧げています。

厳密にいえば、長崎教会管区の知牧区から教区への昇格記念の日ということになります。つまり福音の種は、472年前に聖師フランシスコによって蒔かれているわけなので、教会行政上のお祝いということになります。

今から66年前の1955年（昭和30年）2月25日に教区昇格の発表があり、同5月3日に長崎教区のヨゼフ里脇浅次郎神父が司教に叙階され、初代司教として着任なさいました。当時私は、4歳でしたが、当時のザビエルの青年会だった桃菌助祭さんたちに連れられて叙階式に行ったことは覚えています。

里脇司教様は、5月8日、それまでローマ教皇庁直轄であった奄美諸島が鹿児島教区に移管されたため、教区の基礎を固めるべく、奄美大島と喜界島をコンベンツアル聖フランシスコ修道会へ、徳之島から与論島と、北薩と南薩をミュンヘン管区レデンプトール会へ、さらに、加治木以東の大隅半島と種子島、屋久島を聖ザベリオ宣教会に委託しました。

当時教区司祭は4人しかいなくて、鹿児島市内のザビエルと鴨池教会だけを担当していました。その後、教区は教会だけではなく教育事業や福祉事業の分野で、たくさんの修道会の方々の協力を得て発展してまいりました。現在の鹿児島教区があるのもこれらの方々のご尽力のたまものであることを肝に銘じ、心から感謝いたします。

さて、「過去を振り返ることは、将来に対して責任を果たすことである」と40年前、聖ヨハネ・パウロⅡ世教皇様は、広島平和公園で歴史的なスピーチをなさいました。

これは、平和の実現のために働くという趣旨の発言でしたが、私は、その責任は戦争に対してのみならず、教会の福音宣教に対する使命にも当てはまるのではないかと考えています。

「過去を振り返ること」は、鹿児島教会が知牧区から教区に昇格したのは、福音宣教を推進するためであり、将来への責任を果たすということ、この福音宣教の灯火を決して、消してはならないということだと考えてしかるべきだと思っています。

ところで、現代社会は今や、第4次産業革命の只中にいるといわれ、社会構造に大きな変化が見られます。それにつれて、人々の意識や価値観にも変化の兆しが見えます。教会の中で、私たちが培ってきた信仰心や神の存在を基礎にした価値観なども一般の人々に通じにくくなっています。

今日の福音で、イエス様は、「あなた方の誰が、パンを欲しがっている自分の子供に石を与えるだろうか。魚を欲しがらるのに蛇を与えるだろうか。」と言われます。つまり、人間の親は、子供に良い者を与えることを知っているでしょう？と仰っているわけですが、私には少し疑問があります。

親は子供の欲求に本当に応えているのでしょうか？

ここでいう欲求というのは、欲望とは異なり子供の成長に必要なものことだと思いません。子供の本当の幸せを願っている親なら、細心の注意を払って、自分の子供の成長に必須のものだけを与えようするはずです。

イエス様はいわれます。「あなたがたの天の父は、求める者に良い物をくださるに違いない」と。私たちは、子供たちにとって何が必須（良い物）であるかを天の父に願い求めたいと思います。

この一年コロナ禍の中で、私たちはずいぶん、「不要不急の用事」について考えさせられています。私にとって何が「不要不急の」の用事なのか、あるいはそうでないのか、随時私たちはその判断を求められています。そうだとしたら、私たちがいただいている神への信仰の実践も単なる習慣としてではなく自由意思による自己決定の行為として捉え直す必要があるのではないのでしょうか。

「だから、人にしてもらいたいと思うことは、何でもあなた方も人にしなさい」とイエスは言われます。つまり、人にしてもらうことを要求したり、あるいはそれを受動的に待つのではなく、自分がしてもらいたいことを、先に人にして差し上げる、つまり、先行的な愛。これこそ、旧約聖書の神髄である、とイエスは言われます。

旧約は、新約を準備する時代です。四旬節はまさに旧約時代を生きることです。

皆さん、この四旬節中、私たちは不完全ながらも自分たちのできる最善を尽くして、天の父のみ旨を果たしていく決意を新たにいたしましょう。